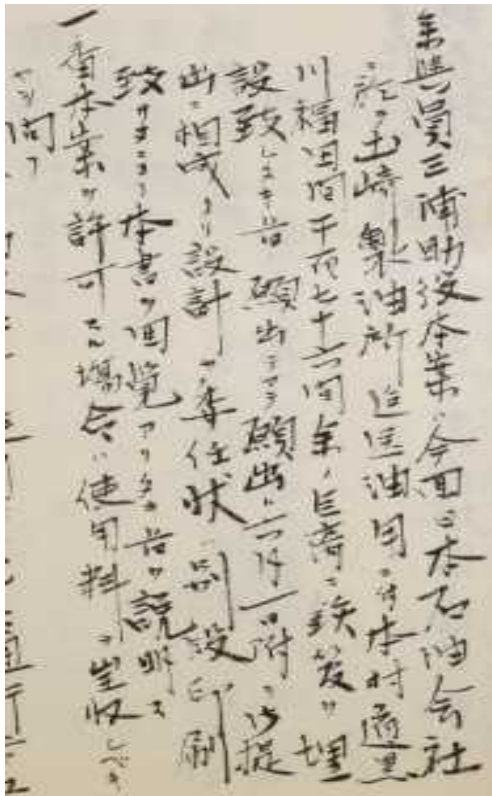


黒川油田の大噴油

明治時代初期から、少量ながら油が出ることで知られていた金足黒川地区。日本石油会社が周辺の油田とともに本格的に掘削を行い、大正3年（1914）5月25日深夜に黒川ロータリー式5号井（市指定史跡）のパイプが深度428mに達したところで突然原油を噴き上げ、黒川は日本有数の大油田となりました。



大正2年6月13日の「金足村会会議録」では、日本石油会社土崎製油所に油を輸送する鉄管を黒川と福田の間に設置したい旨の願い出が提出されております。

「大正2年 金足村会会議録」より

爆発的に噴き上げた原油は粘り気の強い良質油で、毎分16klという勢いで3昼夜にわたって流れ出し、近くの谷間や水田を堰き止めて造った急造の土タンクでしのいだといわれています。

わが国の発展をエネルギー一面で支えた近代化遺産として、昭和43年3月26日に市の史跡に指定されました。

